



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	育児課題への対応における母親のデジタルリソース使用の意味 : 母子保健におけるデジタル社会での育児支援の再考に向けて [全文の要約]
Author(s)	大西, 竜太
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14853号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85226
Type	doctoral thesis
File Information	Ryuta_Onishi_summary.pdf



学位論文内容の要約

学位論文題名

育児課題への対応における母親のデジタルリソース使用の意味

－母子保健におけるデジタル社会での育児支援の再考に向けて－

大西 竜太

本論は、子育てを支援する専門領域の一つである母子保健実践が、デジタル社会での育児支援において直面している課題の解決に向けた糸口を見出すことを目指す。

母子保健は、思春期、妊娠・出産期、育児期を通じた女性の健康づくりおよび親子の健康生活の支援によって、次世代を担う子どもが健康に育つことを目指した実践領域である。母子保健実践は、デジタル社会において特有の育児支援の課題を抱えている。デジタル社会ではスマートフォンなどのデジタルリソースが生活に埋め込まれており、育児において盛んに使用されている。母子保健実践者は、この「育児でのデジタルリソース使用」という新たな現象をどのように理解し、どのような育児支援を展開すべきなのかについてコンセンサスが得られておらず、困惑を抱えている。また、一部の専門家による育児でのデジタルリソース使用に対する批判的言説が、育児の当事者である親の実情と乖離しているにも関わらず、育児でのデジタルリソース使用が「害悪」という社会通念を形成し、逆説的に親を追い込んでいる。

これらの課題は、急速なデジタル社会の進展に育児でのデジタルリソース使用に関する研究が追いついていない現状と、母子保健実践がデジタル社会での育児支援において医学的知見を基軸の中心とし、「専門家による指南」という構図で展開していることから生じている。母子保健実践が抱える課題に迫るには、育児の当事者の視点からデジタルリソース使用のあり方を議論することが必要である。

育児を当事者の視座から理解するため、本論では、育児を集団的な主体による活動として捉え、育児活動を活性化する機能としてのエンパワメントとの関連を念頭に置いて、デジタルリソース使用の意味を探求する。育児を活動として捉える視座を持ち、さらに育児活動を現代の育児における矛盾が集中する母親の視座から捉えることで、より本質的な次元で育児でのデジタルリソース使用の意味を探求することが可能となる。

以上の議論を踏まえ、本論は、育児エンパワメントとの関連を念頭に置きながら、育児でのデジタルリソース使用の意味について解明し、デジタル社会での母子保健実践における育児支援の再考に向けた示唆を得ることを目的とする。

第一章では、育児でのデジタルリソース使用の現状と先行研究の到達点を整理し、本論の課題設定を行なった。初めに現代における育児でのデジタルリソース使用の現状を把握し、現代における育児の日常の変化を象徴する現象として育児でのデジタルリソース使用に着目する重要性を確認した。次に、育児でのデジタルリソース使用に関する先行研究を整理し、先行研究の到達点を把握した。育児でのデジタルリソースの先行研究は、従来のテレビと育児の研究を前身とし、スマートフォンが普及して以降に開始されて間もない段階である。現在の先行研究は、母親が育児においてデジタルリソースの使用に至る実情やデジタルリソース使用によって母親の育児に何が生じるのかについて説得的な情報を提供しておらず、育児でのデジタルリソースのあり方について当事者の視点を組みこんだ議論ができていない。さらに、デジタルリソース使用について育児を取り巻く多様な要素との相互関係を考慮して検討されてこなかったことを確認した。

これを受け、本論の目的を達成するための基本的課題を、3歳児を持つ母親を対象に、育児課題への対応においてデジタルリソースを使用することの意味を明らかにすることとした。その際、その際、育児の日常を取り巻く人々との関係の中で生じるデジタルリソース使用に着目し、育児エンパワメントの観点を念頭に置きながらデジタルリソース使用の意味を探求することとした。母親に着目した理由の一つは、母子保健実践における最も基本的な支援対象であるためであるが、それ以上に現代日本の子育て環境において様々な問題が集中しがちな存在であるためである。3歳児の育児への着目は、デジタル社会での母子保健実践が抱える課題が凝集する時期あることに加え、日本人の母親が育児負担を抱えやすく、親としての成長のタイミングであるためである。また、本論では、夫、家族、友人や育児仲間を育児の日常における人とのつながりと捉え、これらを育児エンパワメント構造に位置付けて捉えるため、榊(2012)のモデルを発展させ、育児エンパワメントの構造とその諸要素のモデルを作成した。

上記の整理をしたのち、基本的課題の達成に向け、育児を活動として捉え、母親と日常的な人々(夫、家族、友人や育児仲間)との重層的なつながりの中で生じるデジタルリソース使用に着目した分析枠組みを作成した。この枠組みは、諸主体による営みである育児活動を母親の視座から捉えた構図を示している。母親の視座から育児活動を捉えることで、育児課題に内在する矛盾を理解しやすくなり、より本質的な次元で育児でのデジタルリソース使用の意味の探求が可能となることが期待される。この枠組みをもとに第二章および第三章にて基本的課題の達成に向けた調査および分析を行った。

第二章では、統計調査により、母親の育児課題への対応におけるデジタルリソース使用の実態および関連要因について、育児の日常の人々(夫、家族、友人と育児仲間)への援助要請との相互作用を考慮して明らかにした。その際、育児課題は子どもの統制に伴う課題(以下、統制課題)に限定した。A市に居住し、3歳児を持つ母親800名に対し、郵送法による自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、統制課題の対応におけるデジタルリソース使用

と夫、家族、友人への援助要請、統制課題の対応の結果（母親役割達成感）、デジタルリソース使用と夫、家族、友人への援助要請の背景要因（孤独感、インターネット依存度、対人関係の安定性、夫からのサポート、家族からのサポート、友人からのサポート）とした。統計解析は、単純集計、t検定、 χ^2 検定、一元配置分散分析、繰り返しのある分散分析、探索的因子分析、重回帰分析をリサーチクエスチョンに応じて行った。

回収数 440 部（回収率 55.0%）、有効回答数は 411 名（有効回答率 51.4%）であった。母親が統制課題への対応において最も頼りにした相手は夫であり、デジタルリソースの使用の比重は最も低いことが示された。また、育児の日常における人々への援助要請は、高い母親役割達成感と関連したが、デジタルリソースの使用は関連が認められなかった。それどころか家族への援助要請が少ない中でデジタルリソースを使用する母親は、母親役割達成感が低いことが示された。母親が統制課題への対応のためにデジタルリソースを使用する背景要因は、「子どもの数が 1 人」「高い孤独感」「強いネット依存傾向」「友人からのサポートの少なさ」であった。デジタルリソースの使用は、母親の統制課題への対応において良好な成果に結びつかない可能性が考えられる。一方、孤独感が高い母親などの育児における人とのつながりが乏しい母親にとって、デジタルリソースは数少ない頼れるツールとして重宝している可能性がある。

第二章を通じて、母親の統制課題におけるデジタルリソースの使用の実態を示し、育児の日常における人々とのつながりを考慮して、統制課題への対応の結果の傾向を捉えることができた。しかし、限界点として、取り上げた育児課題が統制課題に限局されている点、育児課題への対応におけるデジタルリソース使用という現象を断片的に検証したことにより、現象が持つダイナミックなプロセスや構造の理解には至っていない点が挙げられる。この点を第三章にて発展的に検討した。

第三章では、第二章の統制課題への対応に限局した議論を拡張し、全般的な育児課題への対応について検討した。インタビュー調査をもとに、母親が育児課題への対応においてデジタルリソースを使用する様相について、育児の日常における人とのつながりの様相と合わせて詳細を記述し、母親にとっての育児でのデジタルリソース使用の意味を検討した。研究参加者は第二章の質問紙調査の対象者の中から同意が得られた 13 名とした。半構造化面接を個別に 1 回実施し、インタビュー内容は①育児での行き詰まりを抱えた経験、②育児の行き詰まりへの対応と対応における原動力や支え、③育児で困った時に、夫、家族、友人・ママ友をどのように頼り、またどのようにデジタルリソース使用しているのか、④育児においてデジタルリソースを使用することへの考え等とした。分析方法は、ナラティブ分析におけるテーマ分析を行った。まず、研究参加者一人一人のデジタルリソース使用の様相が含まれるナラティブを抽出し、ストーリーラインとして様相を記述した。次に、研究参加者一人一人のストーリーラインを確認し、デジタルリソース使用にはパターンが確認されたため、そのパターンに 4 つの類型に分類した。最後に 4 つの類型の相互関係から、空間配置を検

討した。

結果、母親のナラティブから、育児でのデジタルリソースの位置付けに関する 4 つの類型（デジタル無縁型、デジタル補完型、デジタル窮迫型、デジタル依拠型）を抽出した。

デジタル無縁型の文脈に置かれた母親は、育児課題への対応において基本的にデジタルリソースを使用することはなかった。それは、デジタルリソースを育児課題への対応において使用することに対する限界と弊害を認識しているためであった。また、育児でのデジタルリソースの使用について子どもへの利益をもとに検討する姿勢を有し、子ども本位な育児方針をもとに育児課題への対応におけるデジタルリソース使用を選択していた。このようなデジタルリソースを使用しないこと背景には、豊富な育児の日常を中心とした人とのつながりが関係していた。この類型の文脈に置かれた母親は、夫を中心とした育児を取り巻く豊富なつながりを有しており、デジタルリソースの使用に迫られる状況がほとんど生じていなかった。結果、デジタル無縁型の文脈に置かれた母親は安定した心理状態で子どもと向き合い、育児課題を適切に処理することができ、育児に行き詰まりを抱えることは少ないのであった。

デジタル補完型の文脈に置かれた母親は、育児課題への対応においてデジタルリソースを主体的にコントロールしながら使用していた。母親にとって、デジタルリソースは課題解決に有効な情報ソースであり、自身が直面する育児課題にオーダーメイドな解決策を見出すための補助ツールであった。また、母親はデジタルリソースを通じて他者や社会とのつながりを感じるためのツールとしても使用し、対面での人とのつながりが限られた状況下での孤立感を緩和していた。この類型の文脈に置かれた母親を支える人とのつながりは基本的に豊富であり、母親は育児をするキーパーソンを見つけていた。長年育児をしているとキーパーソンからのサポートが一時的に得られないことがあり、そうした局面において母親はデジタルリソースを育児の補助として主体的に使用していた。

デジタル窮迫型の文脈に置かれた母親にとってデジタルリソースは、必要に迫られて使用するツールであり、主に子どもの統制手段などの手段的サポートとして利用していた。母親は、育児においてデジタルリソースを頼ることに対し、親子双方にとって弊害があると認識していることから、デジタルリソースの使用に対する葛藤や罪悪感を抱え、親としての自信を喪失することもあった。母親にとってデジタルリソースは、育児課題への対応に必要なリソースであると同時に、育児課題を複雑化させる側面もあるのであった。デジタル窮迫型の文脈に置かれた母親は、育児の日常における人とのつながりから得られるサポートが限定的であった。加えて、母親は育児に専念する意識を有する傾向が見られ、育児の共同相手である夫を頼りにする範囲を無意識的に限定していた。結果として、夫は育児の「人手」としての役割以上を果たしておらず、共同育児の体制となっていなかった。夫以外の家族や友人を頼る様子はあるものの、本来的な夫の役割を補完するには至っていなかった。このように夫を中心とした育児の日常における人々からのサポートが限定的な中、差し迫ってデジタルリソースを頼りに育児課題に対応するものの、自己効力感が低いことも重なり、育児の

行き詰まりを抱える傾向が見られた。

デジタル依拠型の文脈に置かれた母親にとってデジタルリソースは、育児での危機的状況における精神安定剤として重要なツールであった。育児課題に直面する中での自身のメンタルヘルスを保つために、デジタルリソースに依拠していた。この類型の文脈に置かれた母親は、オンライン上の顔の見えない他者との交流を通じて、自分の気持ちを他者と共有し、自身の育児に対する承認を得ていた。デジタルリソースは、育児に行き詰まる中での辛さを軽減するツールとして活躍していたが、行き詰まりを解消するツールではなかった。一方、この文脈に置かれた母親にとって夫の存在はストレス源であった。夫からのストレスは甚大であり、母親の精神不安定に大きく影響していた。サポーターとしての夫の欠如は、育児責任を分かち合う他者が不在であることを意味し、母親の育児負担は物理的にも心理的にも大きな状況であった。夫以外の家族や友人・ママ友についても母親の自己肯定感の低さなどの内面の不安定性によって、サポーターとして頼れる範囲が限られていた。この文脈に置かれた母親は、自分の育児に対する理解者が欠けており、育児の行き詰まりを人とのつながりで解消することは難しく、むしろ夫との関係不和から生じるストレスにより、育児の行き詰まりが強化されていた。結果として、母親は育児の行き詰まりに追い詰められ、育児に向き合えない状況を経験していた。

育児でのデジタルリソース使用の4種類の相互関係を検討したところ、人的リソース及び内的リソースと育児の行き詰まりを軸とした空間配置が確認された。デジタル無縁型は、人的および内的リソースが最も充実していると同時に、育児の行き詰まりの程度が最も低い状態であった。デジタル補完型は、デジタル無縁型に比べると人的および内的リソースが限られるものの、デジタル窮迫型とデジタル依存型よりは大幅に充実しており、育児の行き詰まりの程度は低い傾向にあった。デジタル窮迫型は、デジタル無縁型とデジタル補完型に比べて人的および内的リソースが少ないことから育児の行き詰まりの程度も高まっていたが、デジタル依拠型に比べると一定程度人的および内的リソースが保たれており、育児の行き詰まりの程度は抑えられていた。デジタル依拠型は、人的および内的リソースが最も少なく、同時に育児の行き詰まりの程度が最も高い状態であった。デジタル無縁型とデジタル補完型の位置は比較的近く、一定程度離れた位置にデジタル窮迫型が存在し、さらに離れた位置にデジタル依拠型が存在した。

上述の4類型とその相互関係より、育児課題への対応におけるデジタルリソースの役割・機能には、4つの側面が確認された。デジタルリソースによる情報的サポートは、極めて大きな母数に基づく情報について時と場所を選ばずに取得できる点が強みである一方、オンライン情報のみから育児の一般像が形成されるリスクを孕んでいた。デジタルリソースによる情緒的サポートでは、オンライン空間におけるライトな関係の他者との連帯感や共感体験が得られる一方、その効用は対面には及ばないという限界を有していた。デジタルリソースによる評価的サポートでは、オンライン上における育児の承認と肯定を高い確実性のもと得ることができる反面、母親の育児観の偏りや対人摩擦からの回避のリスクを孕んで

いた。デジタルリソースによる手段的サポートは、子どもの統制や遊び相手の代行であり、母親を助ける面があるものの、母親規範意識を内面化しているデジタル窮迫型の文脈に置かれた母親が自己肯定感を損なうことにつながっていた。育児課題への対応におけるデジタルリソースは、育児の行き詰まりの渦中におけるストレスからの心理的症候を軽減する役割は果たすものの、行き詰まりを解消する決定打になるような直接的なサポート効果はないと考察した。母親の育児においてデジタルリソースは、危機的状況下におけるストレスに対する対症療法としての意味があった。

終章では、各章の要約を整理した上で、基本的課題および研究目的の到達について考察した。基本的課題への到達点を論ずる前提として、本論の結果から育児エンパワメントの諸要素には、オンライン上の育児仲間との連帯が含まれることが明らかとなり、育児エンパワメントの構造と諸要素を再構築した。その上で、育児でのデジタルリソース使用の意味は、母親が置かれた4つの育児エンパワメントの構造により異なることが示唆された。

デジタル無縁型の文脈に置かれた母親は、育児の日常における人とのつながりが豊富であり、夫や家族、友人や育児仲間との相互作用の中で、あらゆる側面のソーシャルサポートを得ることができており、デジタルリソースを要しないエンパワメントの構造を備えている。特に、夫との対話の繰り返しは日々の育児への取り組みの振り返りとなり、自分自身と向き合う時間となり、高いレベルのエンパワメントとなっているであろう。デジタルリソースはデジタル無縁型の文脈に置かれた母親のエンパワメントにとってはまさしく無縁であると考えられる。

デジタル補完型の文脈に置かれた母親は、育児の日常における人とのつながりが豊富であるものの、デジタルリソースもまた重要な位置付けにあった。デジタルリソースは、オンライン上の見知らぬ他者との連帯感と育児への承認をもたらし、母親が育児に取り組む原動力となっていた。デジタルリソースは人的なリソースからのサポートが少ない時の補完として働き、パワーレスを引き起こすことを予防する意味を有していたと考えられる。一方、デジタルリソースは、母親の育児観に偏りを生じさせる可能性や対人摩擦を回避する志向を生む可能性がある。これらは、育児の日常における人々との関係を弱める方向に働く可能性があり、エンパワメントのための資源を枯渇させる可能性も同時に有している。

デジタル窮迫型の文脈に置かれた母親は、母親規範を内面化していることで、育児の日常における人とのつながりからのサポートを選択的に減退しており、その分デジタルリソースによる手段的サポートにて補っていた。手段的サポートとしてのデジタルリソース使用は、育児の外部化につながる行為であり、母親規範意識を有するこの類型の文脈に置かれた母親にとっては、自己肯定感低下につながっていた。デジタルリソースはサポートとして働いていると同時に、パワーレスをもたらしてしまうのであった。

デジタル依拠型の文脈に置かれた母親は、自己肯定感が低く、夫を中心に育児の日常における人とのつながりが限られており、エンパワメントに必要な資源が枯渇していた。その中

で、デジタルリソースは限界がありながらも、ソーシャルサポート機能を果たしていた。オンライン上での見知らぬ他者から自身の育児に対する肯定を得る、辛い気持ちを即時的にオンライン上の他者と共有するといったサポートは、パワーレス状態の母親の力がさらに低下することを防ぎ、急場を凌ぐ意味を有していた。ただし、デジタルリソースだけでは、パワーレス状態の母親の自己肯定感を育むなどのパワーレス状態を改善するには至らず、限界があるのであった。

以上の基本的課題の到達点を踏まえ、デジタル社会での母子保健実践における育児支援の再考に向けて、以下の実践への示唆を述べた。

母子保健の専門家は、母親が置かれた育児活動の文脈によってエンパワメントの課題が異なるが故に、育児での母親のデジタルリソース使用が持つ意味が多様であることを前提として育児支援を展開することが重要である。特に、本論が提示したデジタルリソース使用の4類型を念頭において、家族をアセスメントし、類型により異なる育児エンパワメントの課題を支援することが重要である。

デジタル無縁型の文脈に置かれた母親は安定した心理状態で育児課題に取り組める傾向があり、子どもの将来のことを考え、デジタルリソースと子どもをどのように向き合わせるべきか試行錯誤している。よって、子どものデジタルリソース使用のあり方を検討するための医学的知見に基づく情報提供が有効だと考えられる。

デジタル補完型の文脈に置かれた母親は、デジタルリソースからの情動的サポート、情緒的サポート、評価的サポートを存分に活用するため、デジタルリソースによる恩恵と弊害の両面に晒されることとなる。よって、この類型の文脈に置かれた母親には、デジタルリソース使用による弊害の影響を最小限に止めるための支援が重要であろう。具体的には、情報リテラシーの向上に向けた支援が有効だと考えられる。

デジタル窮迫型の文脈に置かれた母親は、母親規範意識が強いことから夫との共同体制が十分ではなく、不本意な中でデジタルリソースを使用せざるを得ないことで、自己肯定感の低下が生じていた。この類型の文脈に置かれた母親のエンパワメントのためには、内面化された母親規範意識を相対化するための支援を提供し、夫（パートナー）を含めた育児の日常における人とのつながりによるエンパワメント構造を強化すること、デジタルリソース使用が自己肯定感の低下につながることを防ぐことが重要である。

デジタル依拠型の文脈に置かれた母親は、自己肯定感が低く、夫（パートナー）を中心に育児の日常における人とのつながりが欠如しており、エンパワメントに必要な資源が枯渇している。この類型の文脈に置かれた母親にとってデジタルリソースはいざという時の拠り所であるため、支援者は母親がデジタルリソースに依拠するのを妨げてはならない。ただし、デジタルリソースは対症療法としての意味しかなさないため、デジタルリソースだけに頼る状況では母親はエンパワメントされず、育児に行き詰まりを抱えたままとなってしまうだろう。この類型の文脈に置かれた母親が育児の行き詰まりを脱却するには、母親がデジタルリソースを使って育児の行き詰まりに伴うストレスを耐え凌いでいる間に、日常的な

人との繋がりを再構築し、母親が豊富な人との繋がりの中で育児に向き合える体制を支援することが重要である。

以上のように、母子保健の専門家は、4つの類型を念頭に置いたアセスメントをもとに、類型により異なる育児エンパワメントの課題を支援することが重要である。そのためにも、育児でのデジタルリソース使用の当事者が置かれる文脈と、そこにある育児エンパワメント課題の多様性を、育児支援の前提として位置付けることが重要だと考えられる。

本論は、母子保健における育児でのデジタルリソース使用に対する育児支援への新たな示唆を与えた点に意義はあるものの、以下の4点の研究の限界がある。一つ目に、本論が対象とした母親は、高学歴で暮らし向きが安定した傾向があり、本論の結果は普遍性を保障するものとなっていない。二つ目に、本論が検討したデジタルリソース使用の文脈は、問題状況における育児課題への対応に限定しており、さらにその問題状況は一般的なものに留めていた。本論とは異なる育児の文脈におけるデジタルリソースの意味を検討した場合、異なる結果が見出される可能性がある。三つ目に、本論はデジタルリソース使用と相互作用する要素として、育児の日常的な人とのつながりを捉えたものの、母親の地域とのつながりや専門職とのつながりについては十分に検討できていない。四つ目に、本論では多様なデジタルリソースを統合して取り扱っているため、スマートフォン、インターネット、子育てアプリケーション、オンラインフォーラムなど各テクノロジーやそのコンテンツの違いを細分化した、育児での意味の違いは議論できていない。

今後は、育児エンパワメント論そのものを取り上げて、デジタル社会での育児支援のあり方を探求することが求められる。本論では、活動としての育児を念頭に置きながらも、育児活動の総体を対象に分析はしておらず、育児エンパワメント論を展開しているわけでもない。そのため、育児でのデジタルリソース使用の4類型を抽出したものの、類型の背後に通底する要素の検討や、類型相互の関係を十分に検討することはできていない。本論は、母子保健実践が抱えるデジタル社会での育児支援の課題を解決するための最初の糸口を捉えた点に意義がある。今後は育児エンパワメント論そのものを取り上げ、デジタル社会における家族の育児活動に内在する矛盾を対象とした研究が求められる。